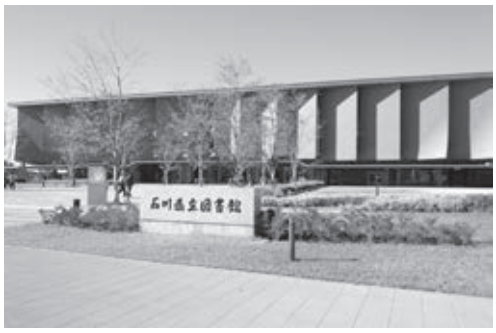
図書館歴訪
～金沢、上野、そしてムーミン

仙台市若林図書館
村上　佳子

昨年の晩秋、金沢市にある石川県立図書館を訪ねました。2024年の日本図書館協会建築賞を受賞した新しい施設で、延べ床面積22,000㎡を超える大規模な図書館です。金沢大学工学部が移転した後の広大な敷地に建ち、ゆったりとした前広場の先に重厚な姿を見せていました。

館内に入ると、１周約160mという回廊式の閲覧空間を中心に30万冊の本が手に取ることが出来るように配置されています。また、500ほどの閲覧席が様々な形で随所に設えられており一日中でも過ごすことができる空間が広がっていました。スタンダードな図書館の資料群に加え多彩なテーマでの展示コーナーもあり、何といっても広々としたスペースが魅力です。土曜日の午後の時間帯でもあり、老若男女が寛ぎながら過ごす姿が見られました。

昨今、子どもたちの居場所が話題になることがあり、家庭と学校以外の第３の場所として図書館への期待も聞かれます。学校に足が向かない時にもこのような空間の中でひと息をつくことができれば救われるように思いました。



石川県立図書館前景

広々とした館内

金沢の帰途には、東京上野にある国際子ども図書館に足を運びました。この図書館は、明治期に建てられた帝国図書館を保存活用した歴史ある建物と新設されたガラス張りのアーチ棟が同居するとても趣のある建築です。

ガラス張りのアーチ棟

旧帝国図書館の建物

国際子ども図書館では、ちょうど開催中だった「国際アンデルセン賞受賞作家・画家展」を興味深く観てきました。1956年に創設されたこの賞は「小さなノーベル賞」ともいわれ、国際児童図書評議会から隔年で贈られます。日本からも、「ぞうさん」で知られる詩人まどみちお、「魔女の宅急便」の角野栄子など５人が受賞しています。

展示では、これまで受賞された65人の作家と画家が紹介されており、「長くつ下のピッピ」のリンドグレーンや、「飛ぶ教室」のケストナーなど日本でも翻訳された本やドラマが人気となった作家もいます。そのなかで目にとまったのがフィンランドの作家トーベ・ヤンソンでした。

トーベは画家でもあり、代表作の「ムーミン」シリーズは現在も世界中で愛されています。登場するのは、おなじみの大きな鼻を持つ森の妖精のようなムーミン一家をはじめ、帽子をかぶったスナフキンやひっつめ髪のリトルミーなどユニークなキャラクター達です。1945年に書かれた第１作『小さなトロールと大きな洪水』は、主人公のムーミントロールがムーミンママと一緒に行方不明のムーミンパパを探しに行く物語です。第２次世界大戦の戦時中から戦後にかけてのフィンランドの状況が背景にあるかのようです。その後、冒険と遊び心がいっぱいの物語が続いていきますが、作者であるトーベの人生観や深い思索を伺うことができます。

展示で紹介されていた著作の中に「すがたのみえない子」という作品がありました。７作目になる『ムーミン谷の仲間たち』の中の１編で、親類のもとで愛を受けずに暮らしてきた女の子が意地悪ばかりされているうちにその影が薄くなり、ついには姿が見えなくなってしまうというお話です。現在出ている作品集では「目に見えない子」として翻訳されています。

ニンニという女の子は、笑うことも怒ることもできずに感情を失ってついには体そのものが消えてしまったのです。ムーミン一家にあずけられることになったニンニは、ムーミンママが作った先祖伝来の秘薬を飲ませてもらってぐっすり眠ります。家族の中で暮らすうちに、まず女の子の足が、やがて体が、そしてついには可愛い顔も見えて、ムーミンママを大好きな少女が現れます。

『ムーミンパパ海へ行く』『ムーミン谷の仲間たち』（講談社）

「ムーミンシリーズ」は、1945年の1作目から1970年に発表された9作までが全集として翻訳されています。日本では、「ねぇムーミン　こっちむいて…」の歌とともにほんわかとしたアニメの印象が強いのですが、一連の物語は「目に見えない子」のほか、ムーミンパパが父親としての存在に思い悩む『ムーミンパパ海へ行く』など大人に向けて書かれたようなものも多く、改めてその作品世界の奥の深さを感じています。

ムーミンは11月になると冬眠に入り、その前には「もみの葉」をたっぷり食べることになっていますが、11月の金沢は漁が解禁されたズワイガニの季節を迎え、メスの香箱ガニを甲羅盛にした「カニ面」を味わうことが出来ました。